

留学生のニーズとレベルに合わせた日本語教材の開発（その2）

Development of Japanese Teaching Materials According
to the Needs and Levels of International Students (2)

田中三千彦・山口隆介・那須由美子*

Tanaka Michihiko, Yamaguchi Ryusuke, Nasu Yumiko

要 約

昨年度から、本学に入学してくる留学生を対象とした日本語教育教材の作成を目的とし、その日本語能力の実情に合わせて、日本語能力の増強を図るとともに、留学生生活をスムーズに進めるために役立つ教材の開発を目指してきた。昨年度は、在学生からのヒアリングにより、海外における日本語教育の実情、来日当初に困ったことなどを調査し、それを生かした教材の開発を目指し、3つの教材を開発した。¹⁾

本年度はそれに引き続き、中上級日本語を学習中の中国人留学生向けの教材開発、3年次編入の留学生向けの教室日本語学習教材の開発、コミュニケーションのための日本語教材の開発に関する報告を行なう。

Key Words：中国語と日本語で漢字表記が同じ語、外来語、人名、カタカナ語、会話のための文法

はじめに

本学は留学生教育について8年にわたる経験を重ねてきたが、より充実した専門教育を施すには、その前提として、来日初期の日本語教育を強化することの必要性を痛感している。そこで、これまでの反省と留学生指導全般の経験を生かし、また、本学留学生の実態に即し、同時に留学生のニーズを反映した日本語指導教材を開発することを目標に昨年度より独自の教材開発に取りかかった。

*聖泉大学 事務部

2 留学生のニーズとレベルに合わせた日本語教材の開発（その2）

そこで、本年度は第1章では、現在の所すべての留学生が中国出身で、最低でも初級日本語は習得済みであるという前提から現在開発中の、レベルとニーズに特化した教材について報告を行ない、第2章では、3年次編入の留学生が日本語で講義を受ける準備学習のための教室日本語教材開発に当たった報告、第3章ではコミュニケーションのための日本語教材の開発に関する報告を行なう。

具体的には第1章は田中三千彦が、第2章は山口隆介が、第3章は那須由美子が原稿を起こし、総合的に討論して完成させた。

第1章 中上級中国人留学生用の教材開発

ここ数年間、本学に入学してくる留学生が全員中国出身で、最低でも初級日本語は習得済みであるという状況から、そのレベルとニーズに特化した教材を開発したいと考えた。中国語と日本語は多くの語彙を共有しており、この共有語彙を利用して日本語で使用する漢字の「読み」を確実なものにしていく方法を半年間にわたりいろいろ試行実験を繰り返し、次のような資料があれば非常に有効であると言う結論に達した。

1. 特定の漢字に対して、その漢字を含む熟語が中国語にも日本語にも存在し、その意味や使われ方も似ていて、発音だけが異なる語彙を探し出す。ここで取り上げた語彙は、どちらの言語でも使用できるので、単に発音の練習に役立つだけではなく、語彙の増加にも寄与できるので、一石二鳥の教材と言うことができる。
2. このような語彙の中国語の発音と日本語の読みを併記し、併せて、その漢字の訓読みも表記することにより、日本語の活用能力を高めることができる。
3. この語彙集は中国語を学習する日本人にとっても有効である。普段使っている語彙のうち、中国語でそのまま使えるものが選んであるので、発音さえ覚えればそのまま使える語彙が増えるわけである。

4. 日本語の常用漢字に、人名漢字などの中から良く使われるものを選択し、2000字強についてこの作業を行うことにした。

具体的には、一つの文字につき、下記のような項目を一行に配置し、1ページに30文字ずつ記載するフォーマットで作業を開始した。

「営」という字を例にとると次のようになる。

文字：営

音読みする語彙：営業

訓読みする語彙：営む

中国語発音：Ying2ye4

音読み：えいぎょう

訓読み：いとなむ

実際に作業を始めてみると結構労力がかかることが分かってきた。まず、選出した音読みする語彙が現代中国語に存在するかどうか、また、存在してもその意味および用法が日本語のそれと近いものであるかどうかを検証する必要がある。

そのため、筆者が作成した原稿を本学に在学する留学生に協力を求め、取り上げた用語の妥当性、中国語の発音などにつきチェックしてもらった。その過程でより適切な用語に入れ替えたり、小職の中国語の読み（ピンイン表記）の不正確であったところを修正してもらったりして完成度を高めた。

本原稿執筆時点で約500字分の資料がまとまった。相当の時間を費やしてまだ全体の1/4程度であるが、作成・チェックの終わった部分を実際の授業で使ってみたところ大変好評であったので、なんとしても最後まで完成させようという意欲が湧いてきた昨今である。2008年度後期から、完成した部分について授業で使っているが、平行して新しい字について資料を整備していき、来年度前期末には完成させたいものと考えている。

また、作業に協力してもらった留学生からは「面白くて自分自身の勉強にもなった」との感想が寄せられた。そこで今後は本件に限らず学生との共同作業でいろいろな教材作りを進めて行きたいと考えている。

第2章 教室日本語—現在進行中の作業の中間報告として—

本学の現状から3回生として編入される学生が今後も一定数あることが予測される。その編入生たちは、本学に入学すると直ちに3回生向けの授業を日本語で受けることになる。現在のところ3年次編入の留学生は高い日本語力を有しているが、3回生向けの授業にどの程度ついていけるかどうかは調査してこなかった。

そこで3回生向けの授業を録音しつつ、その場で重要と思われる日本語表現を書き出し、3回生向けの授業で現れる語および表現を分析する調査を始めた。また付随的にはあるが中国人留学生3回生に協力してもらい、理解困難あるいは理解できない語および表現をチェックしてもらった。

筆者は昨年度『聖泉論叢』に掲載した「留学生の実情に応じた日本語教材」のための調査結果をもとに、本年度前期授業において留学生が後期に入って日本語で授業を受ける際に必要となる日本語力を高めるべく、教室日本語の教材を作成し、学習させた。その試みの中で起きたことも、必要に応じ併せて報告する。

1. 日本での生活の中で出会う語および表現

前期授業中、日本の企業の名前とブランド名とブランドのロゴを使って示し、質問しながら学習させたところ、アルファベットを用いたロゴのブランド（海外進出しているブランド）については、何人かの学生はすでに知っていたが、「ほっかほっか亭」などは海外に進出していないせいか知っている学生はいなかった。

この手の表現は経済・経営関係では頻出する。三回生向けの授業でも、「イトーヨーカドー」「セブンイレブン」「マクドナルド」「セブン・アンド・アイ・ホールディングス」などの企業名・ブランド名が言及された。また企業名ではないが、経済・経営に関する情報源として「東京商工リサーチ」という語も言及された。これらについては今後も学生に教材を作って、すでに持っている語彙を確かめつつ学習させることを計画している。

2. カタカナ語、外来語、またはそれが混ざりこんだ表現

前期授業中、普通名詞に関してはそれが登場するごとに、固有名詞に関しては特に時間を設け、欧米の著名人の名前や中国の著名人の名前が、日本と中国でどう違うか顔写真なり肖像画なりを示して学習させた。また、スポーツ名はカタカナ語が多いので、ある授業では特にそれについて学習する時間を設けた。著名人の名前に関しては必要に応じて中国語でどう表記するかを事前に調べ、それを板書して学生に発音してもらいどちらが原語の音に近いかも言及し、興味を引くことを試みた。

出身国の政治問題に絡む著名人（「ダライ・ラマ」「馬英九」など）を取り上げると、政治的関心の強い学生からは、学生自身の政治的主張が授業中に飛び出す場面もあった。授業の展開のために活用することも出来るが、同時に慎重に扱わなければならないことを痛感させられた。

なお、上記の試みに関しては、別の授業で日本語で日記を書いて提出することになっている留学生から「これらのことは日本語の講義が始まってからでも学べるからよくないと思う」という趣旨の批評を受けたことも付言しておく。

記録した授業内で収録したカタカナ語、外来語、およびそれらが混ざりこんだ表現は「ライフスタイル」「オイルショック」「省エネ」「グループ」「データ」「ミクロ経済」「ブランド」「デマンドタクシー」「コメント」「グッドコメンテーター」「シスターやっている（姉妹都市提携している）」「プラットホーム」などであった。中国人留学生3回生のチェックによれば、すべて理解できないということはないが調査した範囲では個人差が大きかった。これらの言葉の理解度は、学生によって大きく変わるかもしれないので継続して調査する。

3. 専門語、技術的な表現

コンピュータ関係の授業には、コンピュータの操作に必要な語・表現が頻出する。例を挙げると「フォルダ」「ファイル」「入力」「スラッシュ」「D14（ディーのじゅうよん）をクリック」「ツールバー」「パーセントスタイル」「F4（エ

6 留学生のニーズとレベルに合わせた日本語教材の開発（その2）

フよん)キーを押すと番地が固定」「ウィンドウ」「ダブルクリック」「○○関数」「関数を呼び出す」「ウィンドウを閉じる」「ヘッダ」「フッタ」「オブジェクト」「串刺し」「構成比」「各種集計」「ダウンロード」「オート SUM (サム)」「範囲を選ぶ」「見出しを固定する」「タイトル行」など。多くの語が本報告での分類上カタカナ語にも重複して分類されうるが、これは専門語や技術に関する表現は、その分野が外国から輸入されたものであるなら、本国の言葉が直接カタカナ語に「音写」されて用いられることが極めて多いという、日本の言語事情による。

また機械の操作に際して、イメージを助けるためか感覚的な表現が非文法的な表現になることをいとわず活用されることが、記録した授業ではままた見られたように思われる。重複を避けずに例を挙げると「たてに(横に)ずっとコピーを取る」「コピーすると機械がいてくれる」「関数を呼び出す」「見出しを固定する」など。これは記録したのがコンピュータ関係の授業であり、おそらく英語の直訳と思われる表現がそのまま日本語に入っていること、そしてさらに根源的には、コンピュータがまだ日本語に対してと同様、世界のあらゆる言語にとって新たに登場したものであるので、言語表現の側に万人が自然なものと感じる言語感覚が成立していないせいかもしれない。

コンピュータの授業の場合は、上にあげたようなカタカナ語の専門語の多さにもかかわらず、操作に難渋している留学生はごく少数であった。これには、目に見える操作を表す表現やモニター上に実物が示されていること、ソフトウェアは世界共通であることから本国でコンピュータを勉強したことがあるならその知識を活用しやすいことなどの理由が考えられる。しかし、経済・経営関係の授業になると、概念を明確にするための術語が出てくる。授業前の学習はもちろん、授業内ではじめて聞く表現を理解するための基礎力まで必要となるだろう。

例を挙げると「ミクロ経済の限界効用」「GNP」「GDP」「PL」「BS」「エンゲル係数」「限界効用説」「ホモ・エコノミクス」「ホモ・ルーデンス」「ブランド選択行動」「新古典派経済学」「先手(さきて)」「顧客ロイヤリティ」「貯

蓄性向」「可処分所得」「国際通貨」「事例研究」「純利益」など。中国人留学生の3回生にこれらの語をプリントで示したところ、中国語漢語の術語とカタカナ語の術語には理解しやすさには明確に違いがあるようである。今後教材を準備する際には、第1章の田中の研究を踏まえる必要があろう。

4. 今後の授業計画と調査方針

本章1節で取り上げた生活の中で出会う表現および2節のカタカナ語、外来語およびそれらが混ざりこんだ表現に属する固有名詞については、3年次編入留学生に対してはレディネス調査を兼ねた形で効率的に学習させる方針である。3節の専門語、技術的な表現に関しては、コンピュータ関係に関しては、母国でコンピュータを扱う力をどの程度培ってきたかのレディネス調査をした上で必要に応じて学習させる必要があろう。経済・経営関係については当該節で言及したように、他研究と協力して教材作成に当たりたい。

また、チェックに協力してくれた学生とチェックの際に対話したところ、中国で学んだことのない分野の授業が分からない、ゆっくり話してもらうと分かるが早口だと分からない、という意見を言われたことがあった。これはこちらからプリントを提示してそれについてチェックしてもらうというやり方では得られない証言であるので、今後はインタビューも調査方法として活用することを考える。

第3章 コミュニケーションのための日本語

1. 2008年度入学の留学生の現状 ―初級クラス―

今年度の新入生は、「日本語能力試験2級合格、またはJテスト600点以上（2級相当）」の実績を持って入学した。しかし、実際には学力に大きな差があり、前期はこれを1クラスで授業を行うことが非常に難しかった。後期はその反省点を踏まえ、試験を行い、2クラスに分けて授業を行った。

筆者は初級クラスを担当し、日本語能力試験2級レベルを目標とした。後期は12月に日本語能力試験を控えていたので、主に試験を念頭において授業を進めた。

8 留学生のニーズとレベルに合わせた日本語教材の開発（その2）

外国語の勉強は、「文字・語彙」「文法・読解」「聴解」そして「会話」の4分野になる。この中で、筆者は主に「聴解」と「会話」を担当した。この1年を通じて痛感したのは、「聴解」や「会話」はなかなか勉強する機会が得にくく、学生も一番敬遠し、結果としてますます苦手になっていくということであった。また「会話」と「聴解」は、2級未取得者のレベルでは、同時進行で学習することは非常に困難であった。

2. コミュニケーション力とは

「会話」は「話し手」と「聞き手」のコミュニケーションである。会話によるコミュニケーションを行うためには、次の4つの能力が必要だと考えられる（「日本語教育事情」）。

- 1) 言語能力：文法、語彙、発音に関する能力
- 2) 社会言語能力：社会的状況で適切な言葉を使用する能力
- 3) 談話能力：まとまりのある文章を理解したり会話の流れを作る能力
- 4) ストラテジー能力：コミュニケーション上困難が生じた時に、それを調整してコミュニケーションを続ける能力

1) については、一般的な日本語教育で知識を身につけることができる。しかし2)～4)については実際のコミュニケーション体験を通してこそより効果的に学習できるものである。実際、1)についてはテキストを使用して個人で学習できるので、学生も程度の差はあるが自主学習を展開していた。2)～4)は、CDなどの聴覚機材を利用して反復練習などある程度のことはできるものの、実際のコミュニケーション力をつけるには教室内の活動だけでは非常に難しかった。しかし実施訓練をするのが良いと承知してはいるものの、時間的にも物質的にも余裕がないのが現状であった。そのような中で、夏休みにボランティア部の日本人学生の協力を得て、日本語の学習会が開催された。内容は課題を設けてグループに分け、活動を通してコミュニケーションを図るというものであった。例えば調理実習をしたのだが、調理の過程で自然と会話が生まれ、お互い気軽にコミュニケーションをとることが

できたと思う。これは単に日本語の練習ということだけに留まらず、両国学生の異文化理解の第1歩になったと考える。

3. 今後の課題

昨年度、日常会話を学習するにあたって最重要課題は「コミュニケーション力」のアップであると考え「話し言葉と書き言葉の違いを理解させる」「会話のための文法を理解させる」ことを目標とした。会話のテキストには、

① 敬語表現

（例：「行く」尊敬「いらっしゃる」・謙譲「まいる」・丁寧「行きます」）

② 縮約形・音の変化：「～てしまう」→「～しちゃう」

③ 助詞の省略：「～を」の省略「この本、買って」

④ 語順の変化：「誰？あの人」←「あの人、誰？」

⑤ 言葉を重ねる：「いいよいいよ」←「いいですよ」

⑥ 前置き：「申し訳ありませんが～」

⑦ 省略表現：「～どう？」←「～どうですか」

⑧ 婉曲表現：「よろしいでしょうか」←「よろしいですか？」

⑨ 謙遜表現：「Aさんは歌が上手ですね」「いいえ、とんでもない」

⑩ 相槌：「そうですね」

⑪ 思考中：「うーん」

⑫ 呼びかけ：「すみません」

などの表現が多数出てくる。初級学習者の場合、以上のような表現が出てきても理解できないケースが多かった。

会話にはその国の生活習慣や行動様式、ものの見方や考え方が出る。そして特に日本の場合、会話をする相手との関係、場所、目的によって表現方法が変わる。特に敬語表現や謙遜は日本の生活習慣に基づいた言語の大きな特徴である。したがってまず会話の背景にある文化を理解しなくては本当のコミュニケーション力はつかないし、結果として会話力も向上しない。

教室内でコミュニケーションの場を設定してロールプレイをしても、現実

味を持たすことが難しかった。特に初級者同士で行っても会話として続かず、また教師が相手役を務めても、結局教師が質問者になってしまい、一方通行の会話しか成り立たないことが多かった。

4. 教材開発について

以上のことを踏まえて、改めて初級学習者のレベルを具体的に見極め教材開発に取り組みたい。最低でも1年間の中長期的な計画を立てる必要性を痛感している。昨年度「教室日本語」「サバイバル日本語」をピックアップしたが、それらをもとに、今後さらに言語能力、特に日常会話に頻出する言葉の理解度を確認し、社会言語能力、談話能力、ストラテジー能力を個別に調査した上で、新しい教材開発を考えたい。そこで特に注目しているのが日本人学生とのコミュニケーションである。これは留学生だけでなく、日本人学生にとっても異文化理解に繋がることと考える。

今後の課題として「会話」を如何に自然に楽しく実体験させることができるか。活動をするにあたって、どういうきっかけを与えサポートしていくのか、学習者のニーズはどこにあるのかを考え、学習者が積極的かつ自主的に参加し、自らの活動を構築していけるようにすることが重要である。会話の背景にある文化に気づかせ、理解を深めさせ、社会言語能力を磨き、ストラテジー能力を伸ばしていくために、留学生だけでなく、日本人学生の協力も得て、教材開発を進めていきたいと考える。

おわりに

以上が、本学留学生の実情に応じた日本語教材について第2回の報告である。全体としては、学生の協力を得ての教材開発ないし開発のための調査が、教材開発と学生の日本語学習の実情を知るためのみならず、学生自身の学習のためにも有益であるという印象を持った。学生自身が学習の当事者であることを忘れず、絶えず実情把握に努め、留学生の効率よい学習を助ける教材の開発にあたる所存である。

参考文献

田中，山口，那須（2007），『聖泉論叢』第15号，P283～92.